

1870年代の通販商品に見る西欧女性服の実像

— パリ・ルーヴル百貨店の通信販売カタログを資料として —

横 田 尚 美*

要 約

ルーヴル百貨店（1855-1974年）の通信販売カタログを資料として、1870年代の西欧女性服の実像を明らかにするための研究の一環である。本論では、「1876-77年 冬のファッションのイラスト・アルバム」のダイジェスト版を分析した。

カタログでは、アイテム名、素材、色、装飾、形などが説明され、価格が提示されている。注文の際に必要な採寸箇所なども明記され、当時の女性服の特徴がわかる。

カタログで販売されている既製服には3つの形態があり、現在ほど簡単に手に入れられるものではない。それでも支持されたのは、アイテムの豊富さ、装飾の多様性、素材の選択肢の広さからだ。顧客は現在と同様にデザインのバリエーションを求めている。その一方で、どのアイテムでも黒い服が圧倒的に多い。モダニズムを象徴すると考えられてきた黒色は、男性のみならず女性にも既に19世紀後半から多用されてきたことも実証される。

顧客にとって、カタログから服を選ぶことは、どこにいても最新ファッションを享受できるようになったということである。一方、百貨店は布の販売から既製服にビジネスを広げたことがカタログからわかるが、それは布だけを販売するよりも付加価値をつけて服にして売った方が、メリットが大きかったからだ。

カタログの分析によって、当時の女性服の実像、百貨店側の思惑と顧客の欲求が明らかになる。

キーワード：服装史、ファッションビジネス、百貨店

1. はじめに

(1) 研究目的

1852年、パリにボンマルシェが開店する。これが百貨店の始まりと言われている。それ以降、百貨店が次々に開店し、それらの店が通信販売カタログを発行するようになる。百貨店の登場が、既製服の発達を促したとも言われている。しかし、通信販売で売られた女性服についても百貨店の既製服についても、詳しい先行研究は見られない。

オートクチュールと呼ばれる高級仕立て服のビジネスモデルも同時期の1857年に生まれており、

婦人服といえばこちらへの注目度が従来高かったからだろうか。けれど、オートクチュールを着ていたのはごく限られた上流階級や市民階級の中の金持ち、高級娼婦だけである。

通信販売で売られた服は、その値段を見ても、オートクチュールよりは格段に一般的だったと考えられる。より人々の生活に即した女性服の実態を明らかにするには、通信販売カタログの研究は有効に違いない。

そうしたカタログとしては非常に早い時代の資料の一部が、国内では恐らく初めて、多少なりともまとまった形で文化学園大学図書館に收藏された。既に同図書館の「図書館だより」に筆者が報告している通り^①、このルーヴル百貨店の通信販売カタログには、毎号数多くの女性服や服飾小物

2011年11月25日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科非常勤講師 服装史

表1 パリ・ルーヴル百貨店 通信販売カタログ シーズンごとの内訳

collection	tytle		subtotal
BAD	ALBUM de l'Eté 1872		
	1 COMPTOIR DES MANTEAUX ET CONFECTIONS		12
	2 COMPTOIR DES PEIGNOIRS ET DES ROBES TOUTES FAITES		30
	3 COMPTOIR DES ROBES MI-CONFECTIONNÉES		34
	4 COMPTOIR DES INDIENNES ET MOUSSELINES		15
	5 COMPTOIR DES CRINOLINES ET TOURNURES		2
	6 COMPTOIR DES CRAVARES ET FICHUS		9
	7 COMPTOIR DES DENTELLES		8
	8 COMPTOIR DES CHAPEAUX		10
	total		120
BAD	MODE D'ÉTÉ 1873		
	1 MANTEAUX ET CONFECTIONS		32
	2 MODES ET COIFFURES		14
	3 ROBES ET PEIGNOIRS TOUTES FAITES		43
	4 CRAVATES ET FICHUS		13
	5 JUPONS ET ROBES MI-CONFECTIONNÉES		28
	total		130
BWU	MODES D'HIVER 1873-74		
	1 MANTEAUX ET CONFECTIONS		65
	2 CRAVATES ET FICHUS		9
	3 ROBES ET PEIGNOIRS TOUTES FAITES		32
	4 MODES ET COIFFURES		25
	5 JUPONS ET ROBES MI-CONFECTIONNÉES		16
	total		147
BAD	Saison de Printemps 1875		
	1 MANTEAUX ET CONFECTIONS		36
	2 ROBES ET COSTUMES TOUTES FAITES		43
	3 MODES ET COIFFURES		12
	4 ROBES MI-CONFECTIONNÉES		9
	5 JUPES ET JUPONS TOUT FAITS		30
	6 COMTOIRS DIVERS		42
	total		172
BWU	Saison d'Hiver 1875		
	1 MANTEAUX ET CONFECTIONS		77
	2 ROBES ET COSTUMES TOUTES FAITES		57
	3 JUPES ET ROBES MI-CONFECTIONNÉES		44
	4 MODES ET COIFFURES		20
	total		198
BAD	ALBUM ILLUSTRÉ DES MODES D'ÉTÉ 1876		
	1 MANTEAUX ET CONFECTIONS		99
	2 COSTUME ET PEIGNOIRS CONFECTIONNÉS		65
	3 MODES ET COIFFURES		28
	4 JUPES ET JUPONS TOUT FAITS		48
	5 ROBES ET TUNIQUES MI-CONFECTIONNÉS		17
	6 CRAVATES ET FICHUS		40
	7 COMTOIRS DIVERS		6
	total		303
BWU	Album illustré des Modes d'Hiver 1876-77	digest version	
★1	MANTEAUX ET CONFECTIONS	① 32	108
★2	COSTUME ET PEIGNOIRS CONFECTIONNÉS	② 8	41
★3	MODES ET COIFFURES	③ 4	32
★4	JUPES ET JUPONS TOUT FAITS	④ 24	59
★5	ROBES ET TUNIQUES MI-CONFECTIONNÉS		12
★6	TOURNURES ET CORSETS		6
BAD ★7	CRAVATES ET FICHUS		52

BAD ★ 8	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		54
	total		364
BAD	Album illustré des Modes d'Été 1877		
1	MANTEAUX ET CONFECTIONS		87
2	COSTUME ET PEIGNOIRES CONFECTIONNÉS		87
3	MODES ET COIFFURES		36
4	ROBES ET TUNIQUE MI-CONFECTIONNÉS		24
5	JUPES ET JUPONS TOUT FAITS		47
6	CRAVATES ET FICHUS		53
7	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		64
8	TOURNURES ET CORSETS		9
	total		407
BAD	Album illustré des Modes d'Hiver 1877-78		
1	MANTEAUX ET CONFECTIONS		99
2	COSTUME ET PEIGNOIRES Confectionnés		64
3	MODES ET COIFFURES		34
4	ROBES ET TUNIQUE MI-Confectionnés		12
5	JUPES ET JUPONS Confectionnés		64
6	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		70
7	TOURNURES ET CORSETS		16
8	CRAVATES ET FICHUS		81
	total		440
BNF	Album illustré des Modes d'Été 1878		
1	MANTEAUX ET CONFECTIONS		98
2	COSTUME ET PEIGNOIRES Confectionnés		80
3	MODES ET COIFFURES		48
4	JUPES ET JUPONS Confectionnés		63
5	ROBES ET TUNIQUE MI-Confectionnés		36
6	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		108
7	TOURNURES ET CORSETS		21
8	CRAVATES ET FICHUS		81
	total		535
BAD	Album illustré des Modes d'Hiver 1878-79		
1	MANTEAUX ET CONFECTIONS		90
2	COSTUME ET PEIGNOIRES Confectionnés		57
3	MODES ET COIFFURES		48
4	JUPES ET JUPONS Confectionnés		72
5	ROBES ET TUNIQUE MI-Confectionnés		35
6	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		59
7	TOURNURES ET CORSETS		14
8	CRAVATES ET FICHUS		76
9	LINGERIE FINE		20
	total		471
BAD	Album illustré des Modes d'ÉTÉ 1880		
1	MANTEAUX ET CONFECTIONS		97
2	COSTUME ET PEIGNOIRES Confectionnés		70
3	MODES ET COIFFURES		39
4	JUPES ET JUPONS Confectionnés		55
5	ROBES ET TUNIQUE MI-Confectionnés		23
6	VÊTEMENTS POUR ENFANTS		168
7	CONPTOIR DES LAYETTES		32
8	TOURNURES ET CORSETS		18
9	CRAVATES ET FICHUS		121
	total		623
		TOTAL	3,910

BAD Bibliothèque des Arts Décoratifs, Paris, Collection Maciet

BGU Bunka Gakuen University Library

BNF Bibliothèque nationale de France

などがイラスト入りで紹介されている。筆者は同店のカタログを分析することによって、特別な女性だけではなくより多くの女性が着用した服の実態についての研究に先鞭をつけたいと考えた。

同カタログの概観と特に興味深い特徴については、すでに論文にまとめている⁽²⁾。それ以降も調査を進めており、現状は表1に示した通りである。そこからわかるように、調査済の1872-80年の限られた9年間(12シーズン)だけでも、カタログに掲載されている商品の総点数は4,000点弱にのぼる。2011年の日本家政学会第63回大会では、シーズン毎の商品点数の変化を分析して得られる結果について触れた。本論では一冊のカタログに絞って分析してみたい。

(2) 1876-77年のカタログとダイジェスト版の概要

文化学園大学所蔵分には、「1876-77年冬のモードのイラスト・アルバム」(タイトルの原文については表1を参照)のダイジェスト版のようなカタログ(以後、「ダイジェスト版」と呼ぶ)が存在することは、すでに指摘した通りである。

ここでは特にダイジェスト版の元となる「1876-77年冬のモードのイラスト・アルバム」について簡潔に紹介をしておく。

文化学園大学所蔵分は合本されているためか、カタログの表紙がどのシーズンに関しても失われている。しかしパリ装飾美術図書館所蔵分には表紙が付いている。同シーズンのカタログの表紙には、シーズン名が記され口絵がついている。イラストは同シーズンの帽子カタログの312番が転用されている。

文化学園大学図書館所蔵分のカタログの場合、前年分とダイジェスト版の表紙(図1-1)との間には薄紙が2頁挿入されている。表紙の次に、「冬のシーズン 1876-1877」と記された口絵がつく(図1-2)。これらはパリ装飾美術図書館所蔵分にはない。口絵には、やはり帽子のカタログの最初の商品(300番)のイラストが使われている。

こうした簡単な薄いカタログは、文化学園大学所蔵分でもこのシーズンしか存在せず、パリ装飾

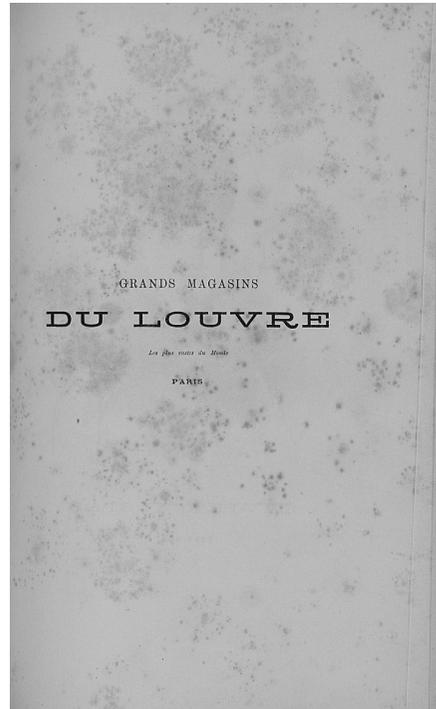


図1-1 1876-77年冬のモードのイラストアルバム ダイジェスト版 表紙 (文化学園大学図書館蔵)

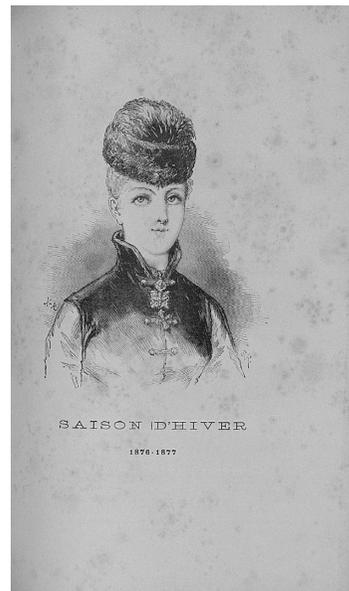


図1-2 同ダイジェスト版 口絵 (文化学園大学図書館蔵)

美術図書館所蔵分には見当たらない。その後このシーズンの本来のカタログが続くが、薄いカタログに収録されている商品は、全て本来のカタログのそれぞれのタイトルのアイテムグループの中に、再び同じ商品番号で掲載されている。関連がはっきりしていることから、薄いカタログに一シーズンのエッセンスが展開されていると考えた。ここには4つのアイテムグループがあり、それぞれ同じ薄紙の表紙が付いている。

この薄いカタログは点数が少ないことから、これを分析することで全体を分析する指標を探ろうと考えた。なお、随時このダイジェスト版の内容を含む本来のカタログのデータと比較したり、そのデータによって補足をしたりしながら、分析を進めて行きたい。

2. ダイジェスト版の全体像

ダイジェスト版に掲載されている4つのカタログ以外に、4つのカタログが同シーズンの本来のカタログには入っている。そのうちの3つは、同年よりカタログに加わった新しいアイテムである。裏返せば、ダイジェスト版に掲載されているのはルーヴル百貨店の通信販売ではお馴染みのアイテムだということになる。また、この3つのうち2つは子ども服と下着で、婦人服のカタログとしては付随的なアイテムである。残る一つのカタログには、唯一の男性用アイテムであるネクタイと女性用の小物が掲載されており、これも服ではなく重要度が低い。

次に、ダイジェスト版に取り上げられた4つのカタログの比率を見てみたい。表1の①と④が群を抜いて多く、②の4倍、③の8倍である。「既製服」の普及率と服装生活における重要度を示すはずだ。

②は、①④とは点数に大きな開きがある。当時の女性服の性質上、特に上半身のボディフィットが求められる。採寸や仮縫いを直接行えない通信販売という手法では、満足度の高い商品を提供することが難しい。

④が多い理由としては、当時の服の性質上、下

半身は比較的ゆったりしていても着装可能だからだと考えられる。②の逆である。単品コーディネートの際に、少なくともスカートは既製服でも構わなかったのだ。

最も少ないのが③であるが、小物ゆえであろう。点数がそれぞれ4の倍数になっているのは、本来のカタログの版を転用した結果と思われる。つまり、印刷上の理由である。

ダイジェスト版に選ばれた4アイテムグループは、全体の中でも欠かせないアイテムであり、それぞれの商品数のバランスはその重要度などにより考えられていると特徴づけることができる。

ただし、婦人帽と服飾小物のカタログ(表の③)は、4点しか取り上げられていないので、本論では割愛する。そうはいても、このカタログは1873年以降の全てのカタログに存在する。時代的に帽子が必需品であったことと、既製品で済ませやすいアイテムであったことを実感させる。

以下に、3アイテムグループを細かく分析して行きたい。

3. 本資料の分析

(1) コートと既製服(表1の①)

このタイトルのカタログは、どの年のどのシーズンのカタログでも必ず最初に登場する。全体からみても本資料のみを見ても、その位置と点数からは、初期女性既製服の中心アイテムはコート類であるという一般論が実証される。

ダイジェスト版には、表1の★1の商品番号1番から99番と800番から808番のうちの、1番から32番までが取り上げられている。★1では、800番台の商品は頁を横に使って、9点が1頁の中に並べられている。その他は、1頁に1~2点ずつ掲載されている。

商品名は、多い順にマントー(manteau)10点、パルトー(paletot)8点、ヴェットモン(vêtement)7点、ロトンド(rotonde)4点、ジャケット(jaquette)2点、アルスター(ulster)1点、プリス(pelisse)1点(これはmanteau ou pelisseとなっている)である。

★1を見ても、商品に舞台用コート (sortie de bal), チュニック (長めの上衣 tunique), ヴィジット (この時代特有のコート visite) の3種類が加わるものの、最も多いマントー、パルトーとヴェットモンの割合の高さとその順位は変わらない。これらが主要商品ということになる。マントーと紹介された商品は4割を占める。

簡単にそれぞれのアイテムを説明しておく。パルトーは、脇にポケットのある¹⁾丈の短いコート²⁾。ロトンドは、丸く裁ったコート³⁾。カタログの図版を見るとその通りである。アルスターは、アイルランド北東部の地方の名に由来する冬のコート^{4),5)}。プリスは、毛皮のついたコート⁶⁾。実際に、この商品は本資料ではキタリスの裏付きになっている。

アイテム毎のカタログのタイトルにも使われ、一般的なコートの意味のマントーとジャケットについては、上記のような特徴がつけられない上着ということになる。本資料の図版を確認するとジャケットは丈が短く、マントーは一概には言えない。さらに抽象的な表現として衣服全般を指すヴェットモン (vêtement) があるが、この場合はドレスの上に着る服という意味で、広く上着とかコートとかということになると思われる。図版では総じて長めの丈で描かれている。

当時の人々は、これらを明確に区別していたのだろうか。種類が細かく紹介されているのは、コート類だけである。他は、スカートならスカートで〇〇スカートなどと区別していない。

コート類は女性既製服の始まりと言われる位で、早くから発達したからということもあろうが、バリエーションをつけられる数少ないアウターだったという理由もあるはずだ。この時代のドレスはシルエットがほとんど固定化されていて、現在のような選択の余地はない。人と大きく異なる格好をしたいと思ったら、ドレス以外で個性を出すしかなかった。それに答えるために、コートによって商品の多様性をアピールしたということが考えられる。これらのデザインが既製のメンズアイテムを転用しているために、既に呼び名がついていたということもあるだろうか。

図版の下には、アイテム名、素材、色、装飾、形などが説明され、価格が提示される。

アイテム名の次に、具体的な用途として「旅行用 (de voyage)」(2点)、「雨と旅行用 (pour la pluie et le voyage)」(1点)と謳われている商品がある。ほとんどが腰丈から膝丈の商品の中で、これらは裾までカバーする丈になっている。生活範囲が広がり、アウトドア用コートも必要になったのだ。これらは、①の最後に集中している。それに対して★1では、この後にもまだ様々なコートが紹介されている。それと照らし合わせて考えると、ダイジェスト版にこうした特殊な用途を持った商品が入るように、計算してカタログを編集していたのかもしれない。

アイテム名の次には、素材が提示される。これだけがイタリック体で表記されている。イタリック体を使っているのは①のみなので、ここからも既製服の中でコート類が最も重要と読み取れる。

全体に無地のラシャ (drap uni) (7点)、中でも黒が目立つ (5点)。次に特徴的なのは、モアレタフタ (poult de soie) (6点)で、絹織物産地リヨンの業者の中でも名高いC.-J.ボネ (Bonnet) 社の布であることを謳っているものがそのうち6点、リヨン産であることを謳っているものが1点ある。本来のカタログでは、前者が10点、リヨン産が2点ある。

イタリック体を使っていることや、織物業者の名前を出していることから、素材が重視されていたことがわかる。業者の名前を明示することで、布やデザインを確かめられない通信販売の信用度を高めることができたはずだ。

冬用の外衣であるためか、キルティング (onaté) が10点に使われている。毛皮も、裏に飾りにと頻繁に登場する。何らかの形で毛皮が使われているのは17点で、インド・ビーバーの毛皮 (une fourrure de castor des Indes) を使った商品が6点と特に多い。こうしたデータからは、季節の特徴やそのシーズンのはっきりとした流行や好みを読み取れる。

装飾では、組み紐飾り (cordelière) 5点とボタンの使用6点が目立つ。外衣は脱ぎ着できなく

てはいけないから、ボタンが必要となる。しかし、例えば23番は「この服は、前を全部ボタンで留める (Ce vêtement est boutonné entièrement devant.)」とわざわざ情報欄と注意書きとの間に、別に一行加えている。女性にコート類が着られるようになるのも、ボタンが使われることが増えて行くのもこの時代であるということの一つの証となる表現だ。

その他、ポー (nœuds), パスマン (passementerie), 飾り紐 (soutache) など、さまざまな装飾で商品の差別化が行われている。

ロトンドのみ、その丈も記されている。1メートル, または1.20メートル以上となっている。やはり膝丈からもう少し長いくらいといったところか。ロトンドは円形のマントで、からだに合わせる必要がないから、丈だけで注文することができたのだ。

こうした商品の説明の下に、さらに2項目が付記されている。これらについては、表2にまとめ

表2 付記事項の比較

(原文は、図2~4のキャプションを参照)

<p>① コートと既製服のカタログ 送るべき寸法：1. 袖丈, 腕の下の縫い目で測る 2. 服の後ろ丈 3. 首 4. 脇の下で, 胸周りを測る 5. 背, 腕, 胸の最も高いところがわかるような胴の輪郭 注意：いずれにせよ, からだにぴったりなボディス (服の上半身のこと) を見本に送る方がよい。</p> <p>② 既製のコスチュームとペニョワールのカタログ コスチューム用：1. ウエストサイズ 2. ヒップの輪郭 3. スカート丈, ウエストから前丈を測る。 4. ぴったりなボディスを見本に送って下さい。 ペニョワール用：首からの前丈</p> <p>★5 半既製品のドレスとチュニックのカタログ 注意：私たちは, 注文する意思のある方々に, 半既製品のコスチュームに用いる布の見本を送ります。全てのコスチュームの布のメーター数は, とても大きなサイズにも対応します。</p>
--

た。1項目めは、注文する場合に百貨店に伝えるべき採寸箇所、細かく指定されている。

これだけ採寸して送るとなると、現在の感覚では既製服とは言えない。どちらかといえばセミオーダーどころか、オーダーメイドの服という感覚に近い。同店には、すでに既製服のアトリエがあったことがわかっている⁽³⁾。通信販売で受けた注文にも対応していたに違いない。

そして、ここに示された採寸箇所は、2.を除いて全て上半身である。この時代の女性服の上半身がいかにかボディフィットを求められていたかわかる。スカート部分はからだから離れているから、丈さえ合っていれば正確な寸法はいらない。これは、スカートのカタログを検討する際の比較事項ともなる。

2項目めには、注意書きがある。大文字であることから、この情報は強調されていると考えられる。顧客の服を送ってもらうことで、よりぴったりとした服を仕立てようとしている。

この2項目はいずれも、当時の女性服の特徴をよく示している。現在の意味での女性既製服の発達がまだまだ難しかったということが実感できる。

(2) 既製品のコスチュームとペニョワール

(表1の②)

このタイトルのカタログは、前シーズンから登場する。コスチューム自体は1875年に登場した。図版を見ると、どれもこの時代に多い上下二部形式である。

★2の商品番号102番から142番のうちの110番から117番までがピックアップされている。

この中には、タイトルにあるペニョワールは1点も含まれていない。★2の中にも、ペニョワールという商品名はない。その代わりに、部屋着 (robe de chambre) が8点、朝用部屋着 (matinée) が2点紹介されている。ペニョワールはガウンの総称と捉えられているのだろうか。なお、本来のカタログにおけるコスチュームの割合は、7割となっている。

また舞踏会用ドレス (robe de bal) が、本来

のカタログには1点掲載されている。

これらのことから、百貨店は単価を考えれば gown よりも一般的な服を売った方がよいし、買う側もまずは外に着て行くものを買いたいという、通信販売に求める両者の思惑の一致が浮かび上がる。だからダイジェスト版では部屋着は選ばれなかったのである。

素材は4点がカシミアで、色は5点が黒である。コスチュームが8点続く頁をピックアップすることを優先した結果、オリジナル素材であるパイル＝ルーヴル⁽⁴⁾が使用される商品が★2には4点あるのだが、ダイジェスト版には選ばれていない。

5点は長めの上衣とアンダースカート (jupon) という組合せである。長めの上衣を指すチュニックと明示されているのは3点、そのバリエーションであるポロネーズ (polonaise) が1点である。図3-1でも左の112番がこの組合せになっている。

アンダースカートは、プリーツ (plissé) やフリル (volant) など裾が装飾されている。このことについては、(4)で詳しく考察する。チュニックも下半身の部分に、リボン飾りやプリーツなどが施されている。この時代の女性服は上半身のボディフィットが重要なポイントだったため、代わりにからだから離れる下半身に装飾をつけて服の個性を表現したと考えられる。

そのうち、2点には別にスカートが付いている。★2ではそうした商品は4点ある。2枚目のスカートは、jupe (スカート) と表記されているが、チュニックの下では裾位しか見えない。チュニックとセットならアンダースカート、それと独立しているとスカートと区別しているようだ。

このカタログの下にも付記がある。「送るべき寸法」というタイトルは①と同じだが、求められているサイズは①と重ならない (表2参照)。

①では、ウエストサイズは求められなかった。②では上半身からウエストにかけてフィットしていることが求められるので、ウエストサイズは必須となる。上半身の採寸が求められていないのは、ボディスの送付が前提になっているからだ。必ずボディスはからだに合っていなければならないからである。

ヒップについても、この時代の流行は太股あたりまでがフィットしたシルエットになっているため (図3-1参照)、ぴったりしていないと満足できなかったはずだ。

(3) 既製品のスカートとアンダースカート

(表1の④)

このアイテムは、シーズンにより既製品であったり「半既製品 (mi-confection)」であったりするが、これも1873年からは必ずカタログに登場する。

ここでは、★4の商品番号200番から258番のうちの231番までが取り上げられている。アンダースカートが1点のみ、後は全てスカートである。★4でも、アンダースカートが3点、ペニョワールのカタログには1点もなかったペニョワールが1点あるのみで、9割以上はスカートである。

既製品という意味に tout faits という熟語を使用している。発注上の付記や注意書きはない。

一方、スカートの前丈 (longueur devant)、後ろ丈 (longueur derrière)、裾周り (largeur) のサイズが明記されている。客はそれらの情報から自分のサイズに合った服を注文することになる。これこそが、現在の感覚で言う既製服である。

たびたび述べてきたように、この時代の女性服は特に上半身がフィットしていなくてはならないが、スカート単品であれば上半身を考える必要がない。だからスカートに関しては、客も既製品の中からサイズ、デザインともに自分に合ったものを選ぶという作業で済んだのである。ウエストサイズが書かれていない点が気になる。

単品ゆえある程度想像ができるからだろうか、サイズが決まっている分多くの中から選んでもらおうという意図があったからなのか、このアイテムだけは1頁に4点ずつ商品が載っている (図4-1参照)。②では、長い丈のチュニックにアンダースカートという組合せが見られたが、ここでは上にチュニックを着ている図版は少ない。④ではスカートが主役なので、上衣の丈も短くしてスカートのデザインがわかるようにしている。

さらに素材も色も、このアイテムに限って2種

類提示されている。延べ点数としては、24点の3倍の72点となる。予算に合わせて選べるというメリットもあるだろうが、TPOに合わせて素材が選べるし、自分の手持ちの服に合わせることもできる。

最初に提示される素材は、シルクのモアレタフタが32点中29点で圧倒的に多い。後から紹介される素材は、カシミア (cachemire) が多く24点である。

色は、1点明記されていないが、それ以外はすべて黒を最初に紹介し、その後、同素材の色無地を紹介している。1点の例外を除いて、黒よりも色無地の値段が高い。最後に異素材の色無地を紹介している。

①から③でも黒が多いことを指摘してきたが、特にスカートで黒が用いられている。理由は、単品コーディネートの際に着回しが効くということや、汚れが目立たないことなどが考えられる。

黒と他の色では、ほぼ15フランから20フラン位の価格差がある。例えば、シルクの黒なら78フラン、シルクの色無地なら98フラン、カシミアの色無地なら35フランという商品と、シルクの黒なら59フラン、シルクの色無地なら79フラン、カシミアの色無地なら27フランという商品が5点ずつ紹介されている。だいたい価格帯が決まっていることになる。

黒が安いことに関しては、松原建彦が19世紀に「奢侈的織物（すなわち模様織）から安価な織物（すなわち主として無地織、続いて交織織）へ」という、絹織物のいわゆる『大衆化』（démocratisation）の現象が着実に進行して」いた、「世紀後半には、内外市場ともに、流行は…単純で安価な純絹の無地織や交織物へと決定的に移行した」と述べている⁷⁾。

色無地の2種類には、どちらも「どんな色合いでも」という但し書きがついているが、片方にnuances、もう片方にteintesと、必ず2語が使用されている。使い方に法則性は見られない。単に同じ表現を繰り返さないためと考えられる。商品のバラエティーの多さをアピールしているのか。

先述の事例の前者は価格差が52フラン、後者

は63フランで、同一デザインでも素材による価格差がかなりある。一般に、価格が高い商品ほど素材の違いによる価格差が大きく、価格が安い商品ほどその価格差も小さい傾向がある。

④の中で群を抜いて高い商品は、240フランの209番である。素材には「cashemir d'or（金のカシミア）」という同店のオリジナル素材が用意されている⁸⁾。「美しい (beau)」という形容詞で修飾されてもいる。これは本資料の中では唯一のオリジナル素材を用いる商品で、その付加価値が目立つ。黒いファイユ (faulle noire) は180フランで、「金のカシミア」なら240フランだ。ただ色無地のファイユなら260フランだから、オリジナル素材だからといって最も高いわけでない。なお、この「金のカシミア」は、★4では4点に提案されている。

次に、商品のサイズを見てみよう。最も多いのは前丈1.10 m、後ろ丈1.25 m、裾周り3 mの商品で、13点ある。次に、前丈1.10 m、後ろ丈1.30 m、裾周り3 mの商品が、6点ある。

際立ってスカートが大きいのも209番で、前丈1.12 m、後ろ丈1.60 m、裾周り3.60 mである。前述のように唯一オリジナル素材を使った商品でもある上、トレーンもつくから裾周りが長く、諸条件から見て④の中では特別な商品だ。

これを含め、5点が「公爵夫人型 (forme duchesse)」と説明されたデザインである。これらのうちの4点は、イラストの女性が横向きか後ろ向きに描かれていて、トレーン付きのデザインを強調している。本来のカタログでは10点がこの形で、6分の1に当たる。実際に、この時代には後ろスカートがトレーンを引くデザインがよく見られたが、これだけカタログに掲載されていることから、ある程度流行していたことが実証される。

209番のカシミアに「美しい」という修飾語が使われていることは既に述べたが、同商品の素材として先に紹介されているファイユにも「きれいな (belle)」という修飾語が使われている。

同様に、「美しい (belle)」「とても美しい (très-belle)」とか、「美しい品質 (belle qualité)」「とても美しい品質 (très-belle qualité)」

やかな (souple)」「とてもエレガント (très-élégante)」といった修飾語が計10点に使われている。こうした傾向が、他のアイテムに全くないわけではないが、本資料の中では④に顕著である。

スカートは、素材も色もほとんどバリエーションがない。商品同士の差別化を図るために、こうした修飾語を用いて印象を変えたのではないだろうか。修飾語については、改めて検討したい。

差別化ということに着目すると、④に特徴的なことがもう一つある。②でも触れたが、スカートの特に裾のデザインのバリエーションの豊富さである。

アルファベット順に、「布を斜めに使う (biais)」、*「ブイヨン (buillon)」、*「ギャザー (couliesses)」、*「クシュクシュのプリーツ (pli crevé)」、*「トリミング (liséré)」、*「プリーツ (plissé)」、*「ギャザーを寄せた (ruché)」、*「フリル (volant)」*という技法が、それぞれにほとんど複数、多くの場合4種類使われている。最も多いのは5種類の装飾を付けているスカートで、2点ある。黒無地で無個性な代わりに、そのディテールはこれほど凝っていた。

前述のようにこの時代の女性服はシルエットが限定的で、差別化が図れない。違いを可視化するとしたら、ディテールを変えるしかないのだ。

4. 結論

(1) 既製服ビジネスと生地販売

既に拙稿で紹介しているが⁶⁾、ピエダードゥ・デュー・シルヴェイラが指摘しているように⁷⁾、実はカタログのこうした体裁が整う前、1860年代の代表的ファッション雑誌「ラ・モード・イリュストレ (*La Mode Illustrée: Journal de Famille*)」⁸⁾に同店のカタログが掲載されていた。同誌の文化学園大学図書館所蔵分でカタログを確認してみると、その初期には既製服より布に重点が置かれていたことが分かる⁹⁾。百貨店の通信販売ビジネスの中心は布から服に移って行ったのである。

先述のように、布の大量生産化が進み、大衆的

な無地の布地が機械生産されていた時代である¹⁰⁾。布と服の生産工程の近代化が車の両輪のようにともに進み、同時期に発展していた百貨店という線路の上を走ったのだ。

そのせいか、アイテムごとに使われている素材が、幾つかに限定されているという特徴がある。コートではラシャ、ドレスではカシミア、帽子ではヴェロア、スカートではシルク・タフタが多い。これは、布が大量生産品であることを伺わせる。

布が大量生産品であるということは、③で述べる黒い服の普及ということとも大いに関わる。

また、商品の中にオリジナル素材やリヨン製などと謳われる素材があることは、同時に薄利多売の人気商品以外にもさまざまな選択肢が用意されていたことを示す。中には通信販売で舞踏会用のドレスを購入する女性もいたかもしれないし、少しでも高級な素材の服がほしいと考えていた女性もいたことだろう。何しろ売り先としてはヨーロッパ全体が想定されていたのだ。

もちろん、特別な素材の商品が良く売れたとは考えにくい、高い品から安い品まで揃っているからこそ消費者が購買意欲をそそられるということもあるに違いない。現在のカタログでも、破格な日用品から宝飾品まで、広い価格帯の商品がしばしば一冊に掲載されているではないか。

(2) 既製服の製造と「既製」という表現

同店における既製服ビジネスの重要性に関しては、シルヴェイラが、同店のショールが既に1860年代の前半に既製品にとって代わられるようになったこと、支配人が既製品の重要性が高まることを認識していたこと、そのため既製服が1863年に採用され、1865年には既製服の成功によって既製服のアトリエが設立され、1866年には500人がそこで働いていたことなどを指摘している⁸⁾。また、通信販売については、1865年に開始したと述べている⁹⁾。

既製服という表現について、①では *confection* という単語が使われている。これは、現在一般に「既製服」と訳される言葉だ。②では、その動詞が使われている。④では *tout fait* という

言葉が使われている。同じ「既製」を表す言葉が2種類使われているのはなぜだろうか。

tout は「全ての、完全な」という意味の形容詞、faire は「作る」という意味の動詞で、「完全に作られている」という意味になる。confectionner も同時代の辞典によれば¹⁰⁾ 同じ意味だが、「製作する、(衣服を)大量に製造する、量産する」と解説している辞典もある¹¹⁾。量産というニュアンスがこの時代にもあって、使い分けている可能性もある。完全な既製服ではないが、少なくとも一点ものではない。だから、現在の既製品、既製服という意味合いには tout fait の方がより近いとも考えられる。実際に、スカートは既製品でよかったのだから¹¹⁾。

カタログからは、この時代に通信販売で売られた女性服には3つの段階があったこともわかる。まずは、寸法と客の服によって仕立てるという、採寸や仮縫いに客が立ち合わないだけの、事実上の仕立て服。これを太田茜は、アメリカの事例に関して注文服として分析している¹²⁾。

①や②では、自分のサイズを少なからず申告しなければならない。その上、アイテムによって求められる採寸箇所が異なっている。もっと面倒なことには、ボディを送ることまで求められている。現代の感覚からすればとても煩わしいことだ。今では自分の採寸すらうまくできない人も少なくない。しかし当時は、顧客も服に必要なサイズ情報というのは自覚していて、それを送ることを面倒とは思わなかったのだ。そこまでしてもこのビジネスモデルは、顧客にとって画期的で魅力的だったことになる。

次の段階として、本資料にはないが★5に見られるように、難しいところだけ既製品を使う家庭洋裁がある。mi-cofectionné (半既製服)と表現されている。表2にこの注意書きも、参考のために掲載した。0から作るよりはずっと楽だということもあるだろうし、何よりカタログから選ぶことで、どこにいても最新ファッションを享受できるという嬉しさ、安心感というそれまでにない感覚を味わうことができたに違いない。

それから現在の既製服と同じ、完成品を送って

もらうシステム。

こうして服の仕立て方の選択の幅が広がったこと自体が、近代化の体現と言える。

(3) 女性にとっての「黒服」

筆者はすでにこのことについて問題提起しているが¹³⁾、服装における黒の意味については、ジョン・ハーヴェイ『黒服』に詳しい。この中で特に近代に関しては、男性服の無彩色化に注意が向けられている。第6章で彼は、女性の黒服に関して特別な意味を見出し、「しかし全体的にみると、黒の採用は女性服では例外に属し、黒が標準化したのは男性服の領域だけだった。女性服はまだ圧倒的に明るい色だった」¹²⁾としている。現存しているこの時代の女性服にも、黒い服はほとんど見られない。

けれど、市民生活を描いた絵画などには黒い服の女性が多く描かれている¹⁴⁾。このことは深井晃子も指摘している。更に深井は、19世紀に市民社会の制度として女性にも黒服が強要され、それが黒服の流行にすり替わって行ったと述べている¹³⁾。本資料からわかることも、圧倒的に黒が支持されていたという事実だ。

黒布が大量に織られ製造販売されて人気があったとしたら、価格も黒の方がほかの色よりも安くなるということは大いに納得できる。時はちょうど化学染料の普及する時代でもある¹⁵⁾。黒という近代的な色は、男性のみならず女性にも、19世紀後半から多用されてきたということが、データとしてははっきりと実証できそうだ。

(4) 1876-77年冬の女性服のプロトタイプ

これまで見てきたことを総合的に考察したうえでカタログの図版を改めて検討してみると、それぞれのアイテムごとの典型的なデザインというものが出てくる。それが売れ筋だったとは断言できないが、百貨店が最も売れる、または売りたいと考えたということは言うてよいのではないだろう。

①では、コートの中のラシャ製品3点のうち、無地の2点が1頁で紹介されている。3点のうち



図2-1 コートと既製服のカタログ7番, 8番
(文化学園大学図書館)



図3-1 既製のコスチュームとペニョワールのカタログ112番, 113番
(文化学園大学図書館)



図2-2 図2-1のキャプション部分



図3-2 図3-1のキャプション部分

で価格が中間帯になる7番をプロトタイプとした
い(図2-1の左)。

②では、チュニックとスカートの組合せで、カ
シミア製の商品112番となる(図3-1の左)。

③では、黒のシルクモアレタフタ製で、スカ
ートのサイズが最も一般的な上、価格帯も5点が重
なる1点200番を抽出した(図4-1の左)。この
商品は、スカートのカタログの最初の商品である。

すると、①②は価格を考慮していないにもか
かわらず、プロトタイプはどれもが90フラン代の
商品が選ばれた。ダイジェスト版だけで早計に判
断を下すことはできないが、4,000点を同じテー
ブルで比較することも難しい。どのシーズンのカ

タログからもプロトタイプを選んで行く作業によ
って、値段を含めまた一歩女性服の実像に迫るこ
とができるかもしれない。

(5) 顧客と百貨店についての考察

旅行用やレインコート、舞踏会用ドレスの配置
などから、ダイジェスト版の構成はそれなりに計
画されていたと考えられる。顧客は特別なアイテ
ムではなく普遍的なアイテムのバリエーションを
より求めたということにもなる。

百貨店は、顧客に商品のバラエティーを強調し
たかった。①について指摘したように、コートの
種類は豊富だ。その豊富さは、具体的に様々なコ



図4-1 既製品のスカートとアンダースカート
200番～203番（文化学園大学図書館）

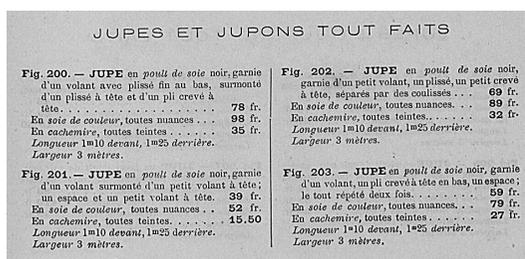


図4-2 図4-1のキャプション部分

トの名前に表れている。名前でもバリエーションが表せないスカートやチュニックには、多くの装飾が施されている。キャプションには様々な修飾語が用いられている。

例えば、④の229番は、「後ろにトゥルニユール（腰を張り出させる下着）を付けたともエレ

ガントで新しい形（forme nouvelle très-élégante, faisant tournure derrière）」と説明されている。この「新しい形」という文句は、現在のファッション雑誌の説明文と全く変わらない。

情報が増え、交通網が発達して、周りの人々との関係性を気にするようになった、経済力を増した顧客が、現在同様に選択の幅と新しさを服に求めるようになったことに対応しているのだ。

カタログは、ヨーロッパ中に送られていたことが分かっている⁽¹⁶⁾。既に報告したように、百貨店の通信販売は返品自由だったが⁽¹⁷⁾、ボディフィットを求められる複雑な「既製服」を売る以上、そのくらいリスクを負わないと注文も受けられなかったのかもしれない。それでも既製服のカタログが作られたのは、布だけを販売するよりも服にするという付加価値をつけて売った方が、メリットが大きかったからに違いない。

そればかりでなく、カタログの流布によって来店客が増したり、地方や海外での知名度が上がったり、他店との差別化が計れたりするという利点もあったはずである。

(6) 今後の課題

カタログの調査と分析を一層進め、様々なアプローチを試みることによって、百貨店の商品という「リアルクローズ」から当時の女性服の実像に少しでも迫りたい。そこに投影される当時の百貨店や顧客である女性たちの考え方、価値観などをあぶり出せればと願う。

それとともに、これまでさほど注目されることなかった通信販売カタログという資料の有用性を再確認することができれば幸いである。

謝辞

この研究のきっかけを与えて下さった上に、本研究において多方面に渡ってご協力下さっている文化学園大学図書館の皆さまに感謝致します。

《注》

(1) 拙稿、稀観本106。図書館だより、文化女子大学図書館、No.147, 2009, pp.3-4.

(2) 拙稿、1870年代パリ・ルーブル百貨店のカタ

- ログに見る既製服ビジネス. 社会文化史学, 第53号, 2010, pp.13-26.
- (3) Piedade da Silveira, *LES GRANDS MAGASINS DU LOUVRE AU XIX^e SIÈCLE*, 1995, Caisse de Retraites dese Entreprises à Commerces Multiples, p. 29.
- (4) 拙稿, 前掲. 注(2), p. 22-23. なお, オリジナル素材に関しては注(5)の論文に詳しい。
- (5) 松原, 十九世紀後半のパリにおけるデパート経営—「イリュストラシオン」紙上の広告分析を中心に. 福岡大学経済学論叢, 2008年, 第52巻第3-4号, p. 495.
- (6) 拙稿, 前掲. 注(2), p. 14.
- (7) シルヴェイラ, 前掲注(3), p. 33.
- (8) *La Mode Illustrée: Journal de Famille*, Paris, Firmin, Dodot, 1860-1937.
- (9) 例えば, 同誌 1866年10月1日号は特別号として発刊され, 同店の1866-67年のカタログになっている。17頁中に, 布が冒頭から2頁半に渡って紹介されている。その後も, 夏用やインド更紗, リネン類など布が各種揃っている。既製服は見開きのイラストを含め, 少数取り上げられているだけである。
- (10) 松原建彦 “第一部 絹製品の需要と生産”. フランス近代絹工業史論, 晃洋書房, 2003年, pp. 43-122.
- (11) 但し, 表1からわかるようにスカートについては1877-78年冬のシーズンより tout fait が使われなくなり, confectionnés となる。
- (12) 太田茜, 1890年代アメリカの婦人雑誌に見る衣服の入手方法. 国際服飾学会誌, No. 31, 2007, pp. 32-42.
- (13) 拙稿, 前掲. 注(2), pp. 23-24.
- (14) 例えば, 「マネとモダン・パリ」展 (三菱一号館美術館 2010年4月6日-7月25日) では, 1862-81年の作品で, 黒い服の女性が11点, 黒

以外でもグレーの服の女性が6点, 茶色の服の女性が4点に描かれており, 濃色の無地が目立つ。

- (15) 松原, 前掲. 注(10), p. 57.
- (16) 拙稿, 前掲. 注(2), pp. 18-19, 23.
- (17) 拙稿, 前掲. 注(2), p. 19.

引用文献

- 1) Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle: français, historique, géographique, mythologique, bibliographique, littéraire, artistique, scientifique, etc.*. 1866-1879, Édition Larousse, tome 12, p. 61
- 2) *DICTIONNAIRE alphabétique de la LANGUE FRANÇAISE*. Société du Nouveau littré LE ROBERT, 1976, p. 836
- 3) 引用文献1) tome 13, p. 1420
- 4) 引用文献1) tome 6, p. 710
- 5) 小学館ロベール大辞典編集委員会. 小学館ロベール大辞典. 小学館, 1988年, p. 2472
- 6) 引用文献1) tome 12, p. 522
- 7) 注(10)参照, “第一部 第1章 近代絹織物工業の重要市場—18世紀末~1870年代—”. pp. 54, 57.
- 8) シルヴェイラ, 前掲注(3), p. 29.
- 9) シルヴェイラ, 同上, p. 30.
- 10) 引用文献1), tome 4, p. 889
- 11) 引用文献5), p. 533.
- 12) ジョン・ハーヴェイ, 太田良子訳 “第6章 黒服の男と白いドレスの女と”. 黒服, 研究社, 1997年, pp. 329-331.
- 13) 深井晃子, “黒服の流行 黒服の厳格とエレガンス 第4章 色は世につれ人につれ—時代と色”. ファッションから名画を読む, PHP新書, pp. 124-129.